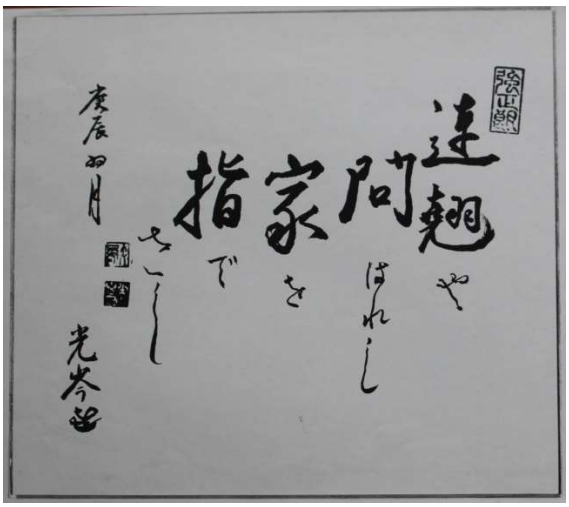
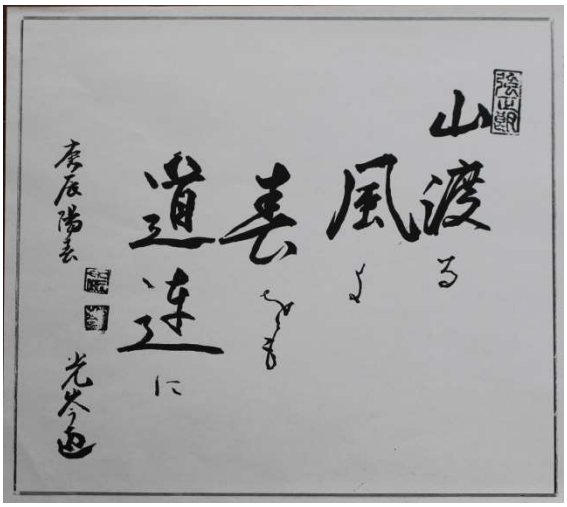
# 降矢静夫俳句集

## 躑躅（やしお）



## 凡例

1．『降矢静夫俳句集　躑躅（やしお）』は、降矢静夫（光岑）（１９１０．12～２００３．２）の交誼をえてきた木俣美樹男・安孫子昭二・金子愛愛・滝川照子が保管してきた降矢の書簡に副えられた俳句を、年代の順に編集した。１～17は降矢の句稿から、18～151は木俣の収受、152～547は四人の収受である。

2．掲載句のうち405句までは、降矢の米寿記念誌『降矢静夫俳句集　雪虫』（１９９８．８）からの再掲、406～547の142句はその後に降矢が他界するまでの４年半に作句された。

3．表題「躑躅（やしお）」は、松姫峠で採取した幼苗が17年目の２０００年５月に初めて開花したことに感動し詠んだ、「461　明暗を込めて咲きにし躑躅（やしお）かな」に因んだ。表紙写真はそのときの情景である（撮影：安孫子昭二）

4．表紙下の色紙は、降矢が卒寿を記念して揮毫した俳句である。

5．降矢静夫に関しては、木俣美樹男が降矢の書簡とインタビューを基に詳細に分析している（「山村農人の教養～降矢静夫　20世紀の山里暮し～」）。安孫子も別途、500通に及ぶ書簡を公開するとともに、本書に所収する俳句を項目別に分類して簡単な解説を付す用意である。

6．降矢書簡の引用箇所の人名はともかく、敬称は割愛した。

7．降矢書簡の引用箇所の数字は漢字のままとし、一般的な数字は新聞に倣い算用数字で統一した。

8．本俳句集は、木俣美樹男の慫慂により安孫子昭二が編集し、俳句集の末尾に、降矢の書簡等を基に解説を付した。

## 昭和51（１９７６）年　降矢66歳

（1～17句は降矢１・２月のメモより）

1　過疎の里冬川瀬の音絶もせず

2　山眠りくぼみくぼみの雪光る

3　雪となり小鳥こつこつ板びさし

4　背なの子に風呂敷かぶせて霰なり

5　屋根はいだ風に首だす山羊の小屋

6　杉売りて山寂寥の冬日か

7　つれなさよ雪になりたる農の葬

8　木々の影春になる陽のまだ厳し

9　さとの川よどみは氷って寒明る

10　山眠る妻が先なり半纏着

11　冬樹の枝打ち鉈は枝打つ

12　背のびしつすくすく伸びて杉木立

13 鶴蔭の荒畑草枯れ頬白（とり）のなく

14 空洞木（うとうぼく）撲けば響きし冬の山

15 目ざし売り風花背中に凍る道

16 生活の疲れ黙して寝る夜寒

17 かたかたとさや鉈鳴し山下る

18 刈干柴（かりぼし）刈りされど蜂の威は弱し

（18 句～151 句は木俣収受）

**昭和 52（1977）年　降矢 67 歳**

19 野は荒涼鳥喰柿薄日して

20 梅の風日脚ののびの頼母しき

21 みそさざい仕事の合図の如く鳴く

22 あくびして背のびする猫と雨の私

23 咲きのぼる葵の花の炎天下

24 稗ぬきを終えて山の子昼寝かな

25 楚々として雨にも耐えて今日の萩

26 立冬の穏やかな日和麦蒔きて

27 短日や干葉あむ手へ日もあんで

**昭和 53（1978）年　降矢 68 歳**

28 松とれて侘しき妻との生活かな

29 竹林の竹伐る音や山眠る

30 春泥や馬蹄ぽくぽく小径かな

31 日の延や紅梅あからむ春ごころ

32 降れば読む晴れれば耕す冥加かな

33 夏草や若蝉縋って朝の露

34 忽然と炎の如く曼殊沙華

35 馬祀る碑の時雨たり山の村

**昭和　54（1979）年　降矢 69 歳**

36 觔斗雲（きんとうん）の如き雲浮く春の空

37 寒梅やひそかに花あり旧元旦

38 紅梅の花のふるえや余寒来ぬ

39 みそさざい早春の譜峡へ告ぐ

40 早春や吾へといえる黒砂糖

41 菜の花や石の地蔵も眠そうな

42 桜（はな）散りてかじか鳴く水田に入れる

43 御神木の伐られて若葉の空ひろし

44 万緑や昼寝の日課水うまし

45 戻り梅雨ポコポコ木魚の施餓鬼会（せがきえい）

46 夕立や稗抜き終えて昼寝よし

47 雨の日は茶の間一つぞわが砦

48 夏去ぬ白露置きたり萩の花

49 日を重ね秋雨降りて蕎麦の花

50 盆栽の乾く小春日妻は留守

51 冬立ちて吾子は母へ似妻にも似て（木俣さん長女誕生に）

**昭和 55（1980）年　降矢 70 歳**

52 春ごころ茶の実からから山の畑

53 松明けて一輪一輪寒梅が

54 着ぶくれて猶ちじみ込む寒の空

55 日の延べや町から運ぶ砂利車

56 今朝の雪木へだけ積り降っている

57 赤蛙騒ぎ出したる峡の川

58 梅の風山並遥か日のあかし

59 花冷や咳かぜつらし葱坊主

60 黙念と桑の細枝の尺取虫

61 蚕上簇（こあがって）暑くなる山の桜ん坊

62 遅れ梅雨あじさい咲きて繭出荷

63 遅れ梅雨緑したたる夏木立

64 紫蘇もめる香がする昼の雨の音

65 夏冷え鎌研ぐ山の杉木

66 稲の穂のようやく見えて冷夏ゆく

67 はかなきや夜空の夢の流れ星

68 狐よけ針金張ってとうもろこし

69 妻眠る蚕上る夕べ栗落ちぬ

70 新涼や葬送の日の秋海棠

71 秋桜のなよやかな花ゆれて晴れ

72 好日やほのぼのいただくしめじ汁

73 古都不知ず古都の味知る冬である

74 山へ雪そろそろくるか秋の虫

**昭和56（1981）年　降矢71歳**

75 ことなげに温水器調べさすはつ日（年賀状）

76 渓声脈脈山容麗　村落点散西原郷

77 死せる者生きいる者も雪の道

78 物忘れ重ねる老いへ寒の風

79 義歯入れて街の雑踏春遠し

80 雪おおう石に蹟く寒さかな

81 うめ咲いて猫が背のびす日の溜り

82 春の雪山なみ白く遥かなり

83 萌兆展開如月空　香雪麗黄鳥

戻来如月之歌

84 **讃** 清太薯（せいだんぼ　中井清太夫が齎した馬鈴薯を讃え）

**鶯**声朗々春鶴蔭　薯古来窮乏救援

終日斜面段畑耕　噫中井徳不朽輝

85 桜花顕

養花一年丹精盡　花開旬日命知誰

春来咲花年々変　老境再若還春

86 新梢へ郭公鳴きて山の麦

87 新梢やだんだんそだつ桜ン坊

88 母の忌や新薯供え新茶そえ

89 新緑深山幽谷鬱　郭公麦秋告眞近

雨止薯花咲段畑　旬日蚕児忙給葉

90 朝顔や老て耕す屋の庭に

91 懶雲（ものぅいくも）ほどなく秋の夏木立

92 熟年の秋ほのぼのとこのつどい（十年振りの同級会）

93 秋冷の木立寂しく木の実ふる

95 ガサゴソと大きな朴の葉が落る

96 短目の落日小豆打ち終る

**昭和57（1982）年　降矢72歳**

97 干支六度巡りきたれる日を拝す（年賀状）

98 黄梅のひと花みつけ春ちかむ

99 あらとうを雨晴れ千代田春霞

100 堀なる鯉の魚紋や水ぬるむ

101 沈丁花新宮殿へのぼる坂

105 若葉風藤の花ぶさ揺れつづく

106 茶摘みの青葉の眩し日は照って

107 蚕上りやまなこくぼみつ髯ののび

108 あじさいの梅雨の終わりの雨である

109 濁流も事なし蝉は鳴きつづけ

110 生き残る稗に網張る暑さかな

111 稗の穂の収穫する手に実のこぼれ

112 月代（きかやき）に似る禿げこみやわれの秋

113 奥郡内柿の実赤くかがやかす

**昭和 58（1983）年　降矢 73 歳**

114 奥郡内霧の中より年あける（年賀状）

115 年頭譜

快し麦飯と葱味噌汁　日日南面に陽を楽しむ可く

116 年を迎え三恩に只感謝す　鶴蔭の小盆地で安住す（土竜）

117 冬枯れや何処へ出るのも峠あり

118 梅からの花信にふれた奥郡内

119 雪ふれば隣も遠し奥郡内

120 しとしとと春になる雨土へしみ

121 咲けば散る花を追ってる蝶である

122 花の雨春眠さめず雨しきり

123 荒梅雨の明けて炎帝威を弄す

124 草きずにしみる夕べの風吹きぬ

125 短目の足より冷えて干葉あみ

**昭和 59（1984）年　降矢 74 歳**

126 霧うまる奥郡内年明けそめし（年賀状）

127 みんなきよめる雪がふり年あける

128 かた眼いれ蚕えのねがい達磨かな

129 山居して稗がゆ啜る雪こんこ

130 春凍る桜さけずして黙想を

131 こおろぎの土間に来て鳴く雨の宵

蚕上りを初栗めしも著りなり

132 菊さけど女おどしの日もありぬ

133 しぐれけり冬めく鶴蔭（さいはら）柿あまし

**昭和 60（1985）年　降矢 75 歳**

134 大かがびの如き山なみはつ日いず（年賀状）

135 春立ちて根雪の山へ雨けぶる

136 虻に夢破られる午睡かな

137 新雪のあかさ眼にしむ初日かげ（年賀状）

138 鶴蔭も雪どっさりとかぶりたり

139 さくらいま駄々こねやっといま咲きいでり

140 かたくりも春と別れてしぼみたり

141 万緑や忙々（せっせっ）とわれほととぎす

142 万緑の奥の山より郭公は

143 蚊を追って団扇ものうし手のだるさ

144 いたどりの花のこぼれや冷し麺

145 山村に棲いてやっと吾亦紅（種苗屋より購入）

146 茶の花やしみじみ秋の日向なり

147 焼酎を草庇うづきぬる今宵

148 雪虫の母のまつこどもそばをとぶ

**昭和 61（1986）年　降矢 76 歳**

149 かぎろびの　谿々そめし　はつ日いづ　（年賀状）

150 凜然と　紅梅花もつ　寒明けり

151 蕗のとう　摘むのも奢り　山居なり

（151 句までは木俣、以下は木俣・安孫子・金子）

152 ほどよけりしめりもたらすめぐみ雨

153 六月は白い花のみ多く咲く

154 父の日の父老いたればじじの日か

155 万緑のいよいよ深しほととぎす

156 夏の日のコビリは薯と稗の餅

157 初雁が小豆はんでるたそがれる

158 菊の香や初鮭うれし山居かな

159 落葉ふむ冬のあし音カサコソと

160 栃餅や山家吹雪いて炉端かな

**昭和63（1988）年　降矢78歳**

161 かべに掛く黍のたね穂へ初日さし（年賀状）

162 凩（こがらし）や石の地蔵尊寒そうな

163 雪ならば壁の種穂へ鳥が来る

164 春寒し爆撃忌きし世のさかえ

165 花待てど奥郡内は雪である

166 行く春へ雉鳴くなり人恋し

167 葉桜やつばめの来る日になっている

168 万緑の雨にいき付くあか牡丹

169 雨ありて四国稗うゆ夏至であり

170 さみだれの雨間若ものの葬ありき

171 炎天下もどれば井戸の水へ縋る

172 むろがやの郡内のもろこし穂いでけり

173 山霧がたれて雨来る暑消ゆ

174 こおろぎや祭りの留守居黙念と

175 黍のたれ穂ほのぼの手にし秋に入る

176 酒肴板野の里のよい祭り

177 金一封これはこれはと背をかがめ

178 なが雨や粟穂うなだれ老にけり

179 木枯しの粟穂ゆすぶる秋なかば

180 菊す枯れ峠へ雪来て野はむなし

**昭和　64・平成元（1989）年　降矢 79 歳**

181 海こゑし稗のすこやか祈る歳（年賀状）

182 雪ふらずとはいうものの冬である

183 立春の日ざしの紅梅はじらいて

184 花の雨黙念ひと日家居かな

185 葱坊主ならんだとなり南瓜うえ

186 鎌倉のみやげ甘し青葉あめ（孫の修学旅行）

187 六月は白の花心にも咲く

188 さみだれのやもうともせで薯病める

189 花栗や心もむなし雨つづく

190 どくだみや梅雨の晴れ間を釈然と

191 沙羅散って炎暑の夏きたりける

192 喘ぎつつ小豆蒔ける合歓の花

193 山百合や土用出水の山の村

194 蛍飛ぶ鶴川ダムの噂たつ

195 ゴキーンと玉蜀黍をかいて篭

196 滔々と鶴水流る夏終る

197 名月の間近となりぬ露白し

198 草刈らばあまた野良着へ草の実は

199 こおろぎや夏もあったろういまの老

200 ハラハラと落葉す山草刈て

201 しぐれけり杖つき歩く落葉みち

202 星食った二日の月は細かりき

**平成 2（1990）年　降矢 80 歳**

203 山河春暦日むなし山居かな

204 如月の西原山地雪尺余

205 冬眠の吾もはひ出ぬ春一番

206 残雪の坂道怖しするするり

207 縄文の雑穀作り後の世人

208 牛鳴いて桜咲きたり川はさみ

209 片栗や友（金子さん）の来ぬ間に花萎む

210 若葉風友にすすめる黍の餅

211 行く春や苺もぎたり蕗の葉へ

212 郭公よ里芋の芽が生えてきし

213 ジャガ薯花咲く畑に更衣して

214 花栗や四石稗植ゆ夏至暑し

215 花栗の終わりとなりて半夏生来し

216 みちのくの紅花今日郡内で咲き

217 紅花とふれあうことの有難さ

218 日ぐらしや入道雲の湧く夕べ

219 炎天下南瓜もぎたり手へ重し

220 暑ければ暑しとグチす土用照り

221 安曇野の石仏和む稲の秋

222 こおろぎの鳴く夜となりぬ山家かな

223 石仏も和む安曇野稲の秋

224 秋日和大鍋囲む芋煮会（十一月三日鶴川畔で）

225 茶の花やあれこれ思う山の畑

226 柚の香や日向嬉しく冬である

227 短日の霜の谿谿霜きえず

**平成3（1991）年　降矢81歳**

228 むろがやの奥郡内も初光り（年賀状）

229 点滴の水滴見入りまた今日も

230 春の雀鹿の子模様に畑へふり

231 桜咲くとはいうもののさりながめ

232 若葉かぜ眼しむ光街へ行く

233 若葉かぜジャガ薯の芽生えにけり

234 卯の花の病む眼へ淡く映じたる

235 万緑へさんさんそそぐ日の光り

236 紫陽花や傘さす女の顔みえず

237 郷愁や桑の実熟す桑を見し

238 長生し眼を病み病棟夏木立（立川共済病院入院）

239 花蕎麦のすがし花咲く遺跡園（埋文センター雑穀見本園）

240 僚友の去り又去り七月に

241 刈干やえっちらおっちら来ては刈る

242 木枯や里芋埋め山の裾

243 時雨るや菊も素枯て山家かな

244 小春日や友がおくりしシクラメン

245 初雪の乾葉あめる軒へ舞う

**平成 4（1992）年　降矢 82 歳**

246 とし明ぬ出水の流木へ日がさして

247 悪しきこと申の年なり福が来る

248 仰山な雪ふり積る奥郡内

249 紅梅やはずかしそうなうつむいて

250 背をのばし南枝に咲ける梅を折り

251 彼岸雪展墓もできず雪つづく

252 春たけてなずな花咲く雨の畑

253 初つばめジャガ生えたり産毛の芽

254 若竹や日長の空へ溌溂と

255 松蝉や更衣で忙し女房どの

256 花栗やつゆ空つづくほととぎす

257 梅雨つづく奥郡内は霧のなか

258 山裾の山百合咲きて香りきぬ

259 虎杖の花のこぼれや蕎麦をまく

260 ぽつねんと孤独の秋や吾亦紅

261 菊の香や野で焼く陶の展を祝ぐ（金子さん個展）

262 菊咲いて篤実の技や今日の展

263 茶の花へ蜂のまだ来る日ざしかな

264 茶の花へ蜂生きていて日ざしかな

265 雪虫や山の畑の土大根

266 冬めきてあかぎれ膏を求めけり

267 短日を着ぶくれの我が影とゆき

268 山茶花や白菜の圧し重くして

**平成 5（1993）年　降矢 83 歳**

269 若水でそば茶いただく冥加かな

270 雪もなく奥郡内は山眠る

271 猪熊の騒ぎ談義で雪となる

272 奥郡内ちらほらと梅が日がのびて

273 花かげや嫁ぎゆく吾子を整然と（金子さん長女）

274 彼岸ゆき閼伽桶のみずつめたかり

275 花冷えやジャガの発芽を待ちかねて

276 山裾や迎えし友とカタクリを

277 花の春散るも咲けるも慌しき

278 春の嵐散るも咲けるもあわただし

279 やまぶきや山裾の家に咲き盛る

280 山吹や山裾の屋に咲きたけり

281 のらぼうのとうたち蝶のもつれかな

282 つばくろの来た日うれしく南瓜うえ

283 柿若葉寺の鐘なり友の葬

284 苺うれむぎわら帽へ摘んでいれ

285 馬鈴薯の花咲きそめてみなづきへ

286 あじさいや病んだ日のみよみがえり

287 花栗や雨間急ぎて薯（ジャガ）を掘る

288 深梅雨や友の送りし桜ン坊

289 辣韮を掘りたる雨間つゆ知らず

290 ほおづきのまだ青くして夏若き

291 夏冷え鎌研ぐ山の杉木立

292 山の百合匂い漂う霧の里

293 立秋やトウジンビエは出穂して

294 夕蝉の送り火たける軒で鳴く

295 嵐過ぎ空の青さよ　吾亦紅

296 秋海棠露のこぼれて眼ざむ朝

297 祭り過ぎこおろぎ鳴きぬ夜となりて

298 柚味噌のほのぼのと友のあり

299 大根を抜きつ雪虫そっと追う

300 霜柱踏めば足への冬の感触

**平成 6（1994）年　降矢 84 歳**

301 八十超えて四度の初日拝しけり

302 天の意とトウジンビエの実り手に

303 松とれて寒さひしひし山の村

304 成人の日祝ぎうららか吾子ありて

305 雪の日や音なし声なし山家かな

306 寒中の見舞いと友はお魚を

307 寒明けて裏へ日脚のそっとさし

308 カタクリや乙女のリボンふと想う

309 うららかや山の桜へ友在りて

310 ふじ咲きぬ相州武甲の山若葉

311 若葉風連休明けやふじつつじ

312 卯の花やジャガいも掘りて母の忌へ

313 炎天下トウジンビエの穂波かな

314 こうろぎの鳴く夜となりぬ風涼し

315 こうろぎの土間へ来て鳴く雨の宵

316 忽然と曼殊沙華やわが庭へ

317 秋雨や秋海棠の余滴かな

318 咲く菊や雨でなやめるひと日かな

319 蟷螂の末枯れて草へ縋りつく

320 銀製の時計うでにし秋ふかし

321 冬耕や師走の空は冴えわたり

**平成 7（1995）年　降矢 85 歳**

322 サバンナのヒエはろばろと畑にみのらし（年賀状）

323 としあらた翁とよばれし賀状かな

324 かんの入り仔をもつ犬がよく吠える

325 ほうかむりきさらぎのかぜのずらふく

326 小正月丸木の顔の門男

327 雛だんの蛤なきぬ雪つもる

328 砂糖湯もほっと余寒の咳ぐすり

329 菜の花やともかくうららうららかな

330 春雷やありも私も慌てけり

331 鯉のぼり萌芽の風や山の村

332 新茶の香ほのぼのと立夏かな

333 牡丹咲くとはいうものの逝ける人

334 つばくろや雑穀の苗は芽生えけり

335 つゆ空のやんではふりて鍬おもし

336 みなづきや山の畑のジャガの花

337 花栗やしとしと雨は人恋し

338 花栗や霧の中より匂いくる

339 夏菊がうだつのあがらぬわが庭に

340 終戦忌南瓜の蔓は茂りけり

341 秋の雨秋海棠もすがれけり

342 秋の雨ともかく家に帰りけり

343 鶴水やまつりの灯うかべ蜿蜒と

344 菊の香や庭で粟打つ日和かな

345 菊の花おののきたりぬ今朝の霜

346 雪虫を土大根で追う日かな

347 みじか日の入日の山は裸木して

348 霜柱踏めば足への冬の感触

349 着ぶくれてみじか日入日を惜しみけり

350 着ぶくれて日向の落葉乾くおと

351 年はゆく雪なき山はむなしけり

**平成８（１９９６）年　降矢 86 歳**

352 杖つきて山の端へ出る初日みん（年賀状）

353 犬小屋の白くなりたる春の雪

354 立春やヤット探した蕗のとう

355 如月や砲煙のごと砂あらし

356 雪雪でかまくらのごと犬のこや

357 雪どけの雫やねよりひねもすを

358 畑のみち春が来ている蕗の薹

359 またの雪欠伸かみしめ刻み（タバコ）吸う
360 ぬぐ冬着今朝は又切る山は曇り
361 過ぎしこと問われるつらさ老いの身は
362 キャベツ枯れなずな（花）咲く畑となり
363 都留のさと陛下むかえし桜爛漫
364 桜爛漫陛下迎えしみよ栄え
365 きじは鳴いて萌黄の山の夏近し
366 黍播いて春の名残りの桐の花
367 救い雨いとしくもろこし今日は植え
368 つんつんと小麦穂を出し若葉風
369 つばめの仔巣へ戻るか明日も又
370 どくだみの花咲く径や友恋し
371 海の日も山のはたけでジャガ掘る
372 まずかろと知らねで作りしとうもろこし

373 背のびしてどうかこうかと黍へ網
374 芋月の（15夜）雨後の夜半皓皓と
375 山は霧麓の畑で蕎麦を刈る
376 初霜の黍粟がらへ薄すらと
377 秋しぐれ炬燵で猪の話など
378 今年こそ今年こそとて年終る

**平成 9（1997）年　降矢 87 歳**

379 恙なく初日拝して老の倖（年賀状）
380 門松の松伐る山へ孫も来て
381 雪ごもり干魚かみしめ友恋し
382 鯉のぼり尾をふるごとき青葉風
383 雨なれど友の恵や桜ン坊
384 茎立し慈姑の今日は花咲けり

385 慈姑咲く暑さ戻りし八月の空
386 末枯れたる慈姑侘しく鎌を砥ぐ
387 頬冠り腰をかがめて落葉掃く
388 雪虫やかこい大根埋めけり
389 山茶花の朱を落しつつ日を惜しむ
390 世にうとくいつか師走か疼く腰
391 はや冬至ゆず風呂の香に身を浸し
392 あれこれと思うばかりで年はゆく
393 明暗を重ね米寿迎えけり

**平成10（1998）年　降矢88歳**

394 雪もなく親山小山とし明ける
395 むっくりと親山小山かむる雪
396 着ぶくれて雪の砦をめぐしけり
397 冬ごもり雪の砦の山家かな
398 仰山な雪で戸惑う迂闊かな
399 節ぶんや友のめぐみし魚かな
400 残雪の凍りてピッケルほしき径
401 雪掃いて犬と語りて雪ばれや
402 残雪へ春呼ぶ雨が今日はふる
403 親山も小山の木木も芽ぶきけり
404 葉ざくらや妻の葬すみたそがれる（このえ夫人）
405 牡丹だよとはいいつつも風さつき

（以上『雪虫』所収）

406 春雪の山又白し畑斑　（三月の句）
407 勲章も定年もなく句集かな（句集『雪虫』）
408 遠雷や赤とんぼにげて百日紅
409 初秋や拙き句集世に問はれ

410 コスモスの抱きあっていて嵐去り

411 会釈して別れた畑を雪虫が

412 竹筒の一枝山茶花朱が冴る

413 まごまごと師走迎える山の村

414 年の瀬やあれこれ追れひと日かな

**平成11（1999）年　降矢89歳**

415 鶴蔭の親山雪なし初日さし（元旦）

416 朴落葉がさごそ小鳥　日を浴びて

417 洗顔の水ヒンヤリと寒の入り

418 冬の夜や戸ゆすり風がふと眼ざめ

419 冬天や雪虫舞いつつ日は沈み

420 立春や庭へ風花ちらつきて

421 安曇野のそらの青さも春めきて

422 輪をかいて鳶が春よぶ安曇野世

423 水中に河童しゃがみ（？）池を訪う

424 あかつきや梅花滴して今日も雨

425 カタクリや先立人の精霊か

426 なずな咲く畑へ捨置く鍬へ雨

427 まちぼうけ新緑の雨で夕ぐれる

428 むらさきの眼にしみ通る花菖蒲

429 万緑や握手交せる町候補

430 遠き亡母忌日へ供えし新ジャガや

431 どっしりと石に腰かけ夏の空

432 炎天を逃れ樹下で蝉をきき

433 芋の露晝でも光る秋である

434 コスモスのうす紅色や秋である

435 マゴノ手で背を掻く夜長虫鳴きて

436 冠雪の鳥海へありと友とも会へ
437 友と別れさつまを掘れば遠山日
438 小春日の黄昏れ三日月見つけけり
439 霜柱踏ゆく足ざわり山の冬
440 黙然と冬枯の山見入りけり
441 冬枯れや襟かき合す葬の列

**平成12（2000）年　降矢90歳**

442 双手あげ新千年の日を仰ぐ
443 冬萌て木々の梢の芽が光る
444 冬萌のあずみ野の麦つややかな
445 日向追う冬のみじか日山かげに
446 冬麗ら坂みち下る杖つくる
447 春憂い地図披見しつ旅へ思慕

448 カタクリや春を告けり日向ぼこ
449 蜜蜂が梅へ挨拶今朝は来し
450 1 立春や山葵萌出す鶴の川
451 2 天日浅し土手を背にして爺一人
452 3 山渡る風よ春をも道連に
453 4 花の春閻浮檀金は夢の夢
454 5 春通し水仙寄添う日射しかな
455 6 梅咲きぬ雛の節句や山の村
456 7 菜の蕾寄添う日射し春浅し
457 8 息かけて梅の蕾や息白し
458 9 厚着して風吹く空や曇はとぶ
459 10 道ふさぐ大風後の落た枝
460 日脚伸ぶ辛夷の寺や夕の鐘
461 明暗をこめて咲きにし躑躅（やしお）かな

462 母の忌や白い躑躅が悦ぎて咲き

463 偶然の重なり躑躅友を呼ぶ

464 ぬっと出た枝に咲たる山法師

465 青葉冷えたずねて呉れたほととぎす

466 沛然と雷雨に散れる沙羅の花

467 霧の巻く山村どうにか投票へ

468 山百合や人っ気なき郷日にひそむ

469 秋に入り荒れた畑の竹煮草

470 さりげなく秋の虫の音聞く夜かな

471 新涼や風に揺れてるコスモスが

472 一ト畑へ南瓜胡瓜もゆうがおも

473 百日紅晝の彼岸の回向かな

474 秋しぐれ初栗膳へ旬の味

475 こうろぎよ明夜も歌へ夜長かな

476 宵祭り山裾にかすかな灯が見えて

477 山の秋都庁の友よ紅葉せり

478 ゆく秋の歩めば咳して草紅葉

479 雪虫か短か日舞いて冬となる

480 初霜やこうべ下げたり里芋も

481 追憶の京菜漬たく小春日を

482 短日やたばこ輪に吹き日を惜しむ

483 秋闌けて日追う土手の草紅葉

484 短日をねつ造きき空を仰ぎ（旧石器遺跡ねつ造）

485 寒菊や三頭颪におののきて

486 霜柱踏めば音する日影道

487 木守りの柿へこどくな小鳥かな

488 冬冬だ裸木を見あげて空がある

489 冬日背に宅配便へと作る小包

**平成13（2001）年　降矢91歳**

490 洗米を供えて若水汲む柄杓（年賀状）

491 松七日明けて初雪仰山に

492 どてら着て夢の亡父にぞ似たりけり

493 雪の日やどてらの姿亡父に似て

494 掃き積で雪の砦を廻らしけり

495 立春の陽光さんさん野も山も

496 春ごころ柳の花芽皮をぬぎ

497 残雪に猫と犬との足あとや

498 一人来て二人出て行く春床屋

499 木の芽風菜の花さくら咲くほどに

500 花から葉へ新緑の世や鯉のぼり

501 山若葉待つ友来ず雨となり

502 山若葉菜たねつゆの世今日も雨

503 草青む羽置の里の美流館

504 万緑や食膳にある桜んぼう

505 六月や眼ざめにききぬほととぎす

506 茄子の花つゆの晴れ間惜しむかな

507 つゆ入りの雷雨にぬれて青葉冷え

508 花栗やむっと暑さに花さかる

509 海の日や山百合咲きぬ山の村

510 遠雷や急ぎ洗濯ものを入れ

511 里芋の葉日に焦げたる暑さかな

512 朝顔の蔓のびほうけ晩夏かな

513 新涼やこわばる腰へ薬はり

514 新涼の夕べの庭に虫の声

515 夏果てて秋の野菜や雨が打つ

516 秋茄子をもぐ手にらむかかまきりが

517 やんでまた振り出す雨やそぞろ寒

518 ここよりは川の名かわる　相州路（昭１９）

519 菊匂う月のかがやく　後の月

520 山茶花や師走の風にうつむいて

521 短日や音立てず部屋に一人かな

522 かそへ日の通院の頬に雪舞って

**平成14（２００２）年　降矢92歳**

523 卒寿越へ明治は遠し初日かな（年賀状）

524 親雀仔雀も軒に氷柱かな

525 森かげのおらが住み家雪つもる

526 立春や背戸の氷柱に日がとどき

527 一人居に部屋の広けり三月（やよい）まつ

528 独り居の部屋広し雛祭り

529 杉花粉くすくす眼鼻へ沈丁花

530 葉ざくらや森の樹下に山吹が

531 卯の花や空家の垣に咲きにけり

532 美流館小篭ほしくて友に乞う（写真有）

533 若葉冷えひねもす霧で竹の子掘り

534 栃咲きぬ小豆の旬と亡母（はは）はいい

535 若葉冷えジャガへつぼみだ晴れを待つ

536 父の日やジャガの花咲く山は霧

537 沙羅散って梅雨つづきけり夕の空

538 目まどいに追われてお盆の草むしり（目まどい＝ぶよ）

539 しぐれけり今宵は裏で虫鳴けり

540 しぐれけり野沢菜作れず戻りたり

541 おぼろ夜のほの暗きして春月のごと

542　五錠なる薬忘れず秋深し

543　小菊咲く庭に雪虫日はみじか

544　行く秋や間引き菜洗う日を追って

545　木枯しや冬の粧い肌にしむ

546　初雪の粧いなせる小春日や

**平成15（2003）年　降矢93歳**

547　はりねずみのごとくまるくなりしんねんかな（年賀状）

（2月10日　降矢静夫死去　92歳余）

## 解説

安孫子昭二

### 生いたち

降矢静夫は、明治43年（1910）12月20日に、周囲を峠に囲まれた山梨県北都留郡西原村下城（現上野原市）の農家の七人兄妹の末子として生れている。第2次大戦で徴兵されて2年ほど県外に出たほかはほとんど西原で暮し、教養ある農士として生涯をとじた（木俣美樹男「山村農人の教養～降矢静夫　20世紀末の山里暮し～」）。西原村は北都留郡では最も奥地の相模川水系鶴川の上流域にある。降矢の家は、標高520ｍほどの森蔭の高台に在るので、下城ケ丘と称していた。

『西原小学校創立120周年誌』（1996．3）によれば、西原小学校は明治8年（1875）に村内185戸から学校資料金を集めて開校している。しかし、家の手伝いで来られなかったり、学校に入学できても毎日出席できる子は半数にもみたない時代だったという。その記念誌に86歳の降矢が、「私の大正時代」を寄稿している。「私の小学校の入学は大正六年でした。父に連れられての入学で、教室では知能テストと思われる○△□◇の型を示されて答えたり、数や名前を書いたりしました。形では菱形が答えられず、数はやっと十までで、名前はカタカナでどうにか書ける程度で、今の子供から見ると低能児のようでした。」というが、どうして、実に記憶力の良いことに驚かされる。

西原に電気が引けたのは大正10年で、降矢は大正12年（1923）に西原小学校を卒業する。「卒業したら父が病気で農もできず、旧制中学校に行きたかったが、母を相手に農の主任でした。父はその後七年ほど経て、多少畑に出ましたが、廿四才時で看取りもせず三日目で死にました。その頃から失意と困難がはじまりまし

た。宿命か天意か、過去の事は思い出したくないことばかりです。父の残し刻煙草を失意の中、吸又吸たのが煙草との縁でした。（便303・337・416）「西原を嫌い、農を嫌った私が逃れられもせず、生きるために農より他になく、酒でも呑んだらやけ酒で自滅するだけだったでせう。宿命と戦うために句を作り、畑を作ったのです。（便373）」

父の後を嗣はずの兄は早くに狭い郷関を出てしまった。「若い頃は百姓になる気はなく、家庭の都合上、末子で準養子として家を嗣ました。然しどうせやるならと、努力して村の第一人者になったのです。無名無冠人ですが、農だけは誰にも負けられません。（便34）。」

**戦争体験**

降矢は29歳の昭和14年（1939）10月に、鶴川上流の飯尾のこのゑと結婚、4年目の1943年5月に待望の長女が生まれる。ところが、その5カ月後の10月に、第2国民兵（丙種合格）として海軍に応召される。村境の初戸まで盛大に軍歌で送って貰ったときは、「是が私の葬式と心で思って、」横須賀の海軍に入隊すると、戦闘員ではなく整備兵だった。「海を知らぬのに海軍でしたから戦死すれば海底で、歌のごとく水つくかばねを覚悟、遺書を書き、爪と髪を遺品として出しました。（便472）」

「横須賀から父島に移って航空機整備兵の訓練を受け、（昭和）十九年五月に中継基地の硫黄島に派遣され（一等兵でした）、翌六月より南方（テニアン・サイパン島）が破れ、島は最前線になりました。硫黄島のことは悪夢です。六月半より米国軍の砲撃で兵舎は灰と化して、活火山で灼熱の孤島でしたから水は無く、・・・雨水が飲料水で蓄蔵水樽も失い、防空壕として掘った岩窟で雨露をしのぐ居住地になり、狭いので一班ずつの居住でした。砲撃は日々激烈し、幸か不幸か病弱ですから戦病で入室（入院のこと）、一週間後、送還予定者になり、それから一週間後の十月半に、島に物資を運ぶ輸送船が内地に戻るのに、私を加え四名送還されました。送還されし傷病兵は再起不能者で、島で戦死か内地で病死かです。航空隊は島の浜辺に近い空港ですから送還されるによく、陸軍は山の上でしたから同じ兵でも不可能でした。それだけ運があったのです。深夜に厳しい警戒網を脱出して、三日後に横須賀入港でした。送還後、一ヶ月も経ぬのに硫黄島は完全に封鎖されて孤立し、私が横須賀の病院から湯河原の温泉旅館の假病棟に変わった二〇年三月に総員玉砕だったらしい。

運命は不思議で、翌二月は快方に向かい、三月は経過退院で海兵団に復帰し、横須賀から呉、佐世保を経て、昭和二〇年五月、下士官を含め二〇名程で大分の海軍空港に赴任しました。空港も爆撃されて飛行機も僅で、ここで終戦でした。沖縄は決戦場でしたから、終戦が遅れたら、当然沖縄の決戦場に支援だったでせう。終戦の夕方に、司令官宇垣纏中将は特攻機にて沖縄へ自爆したのです。（便224・472・474・475）」

「応召で出征した私は二年間に七回配置替で、一カ所に五〇～六〇日でした。新しい所に行く度に一ヶ月は上司を覚え、同年兵でも一日でも早い人は先輩として敬意表するので、そうした調べをして、夕食の折に新任としての挨拶を述べるのです。軍隊は一番厳しい社会です。生涯農人で終る私には、今考えるとよい勉強になりました。（七回の配置替で・・・）日本の三分の一の府県人に逢いました。是は今になれば立派な勉強でした。西原で農人暮しでは得られぬ事でした。命を賭した体験でした。（便475）」

降矢は配置替えの度に、西原とはちがう地域の風土や人間性を興味深く観察したのであろう。命を賭した悪夢の体験をも、前向きにとらえる。とはいえ、後年「大本営発表も捏造の報道が多か

ったことを知り（便442）」憤慨している。また、「上の姉たちの子供は（私を）兄さと呼びますが、四つ下の甥が生き残っただけで、私と兄弟同様の人達は五人戦死、一人か二人生き残っていれば話が合って良かったのです。（便489）」と嘆いている。

## 戦後の苦難

降矢は、大分空港で1週間ほど戦後処理してから、汽車を乗り継いで3日がかりで上野原駅に着き、夜通し歩いて8月24日の未明に復員する。ところが留守宅は昭和19年3月に類焼しており、最愛の母親も同年6月15日に他界していた。復員した暁には自費出版を目論んでいた短歌の句稿や多くの書籍も、すべて灰燼に帰していた。「物資のなく、社会福祉もなく、また自動車通わぬ時代の復員で、荒れた畑はあるが、農具も整わず、入植移民のようで、生きるために必死でした。（便224・429）」

その長く必死に働きつづけた過労の付けであろう、大厄41歳の昭和36年（１８６１）に、半年にわたる長期入院で胆嚢を摘出手術し、8月14日に退院する。「長男はまだ十歳で一カ月妻の手厚い看護で再生、以後三年がかりで本復するが、部落で一番の貧乏暮らし、妻らは向かって没落（つぶれる）と言われた程、・・・床屋に行ったこともなく、妻に半襟の一枚買ってあげられぬ貧しさでした。自力で黙々六十年、歯をくいしばって苦難のどん底から這い出した私は、先祖の積善か、自分の努力又天意か、六十年の不遇から抜けて、晩年は人に羨望されるようになりました。然し代償として私のエネルギーは底をつきます。（便224・225）」、

木俣と安孫子が収受した降矢の書簡から、降矢の年間の農作業を作成した（『雪虫』巻末表）。すると75歳の昭和60年（１９８５）頃まで水田、養蚕と麦作を中心にした畑作が重なっている。老境になっても過酷な農作業を夫婦だけで続けたことが、「107　蚕上りやまなこくぼみつ髯ののび」からもしのばれる。

冬季にも冬耕や植林の下刈り作業を行っている。雪が降るまでは暗いうちに起きて山に行き、干柴刈（かりぼし）を背負って帰宅すると、額には汗がにじんでいたという。家の中興と生きるために休む間もなく必死に働き続けて3男2女を育て上げ、3男はいずれも大学を出して立派な社会人となった。「子供は今の時代に自分で選んだ道に進み、皆丈夫で、私の様な一つも望み叶えられぬ代りに、私より生まれ、増したんです。体は不自由ですが私の一生はこれでいいんですね。（便451）」と述懐する。

## 作物や花卉の栽培

下城の家は森蔭にあり、冬は日照時間が短く、気温はマイナス10℃まで下がることもある。寒さ厳しい土地柄で畑の土壌は細礫で堅くしまっている。それを克服するために降矢は、「秋の柴や草刈りが来年の作物の肥料原で、私の作物成績を左右するのです。今ではこんな方法は私のみです。（便69）」という。

従来、西原で作られてきた主な作物としては、ヒエ、シコクヒエ、糯キビ、アワ、穂モロコシ等の雑穀をはじめ、麦、蕎麦（夏・秋）、馬鈴薯、甘藷、里芋、玉蜀黍、南瓜、大根、人参、小蕪、豆類、蔬菜類、蒟蒻、山葵等がある。西原で唯一の水田も作っていた。進取の気性から、「若い頃は、野菜に興味があり、西原でトマト、結球白菜、キャベツも最初に作りました。オクラ、西瓜、路地メロン、落花生も作りました。（便53）」１９９２年にはタマネギとアスパラガスも試作している。

降矢は新な作物や花卉の栽培にも関心がたかく、１９８８年には木俣から粳キビ（長野県栄村産）を譲り受けて試作している。新品種の栽培を試みようとするとき、1年目はその種子が早生か晩生か判らないので、植木鉢に蒔いて発芽から出穂、結実等の期

間を克明に観察し、２年目にその観察を基に種蒔き期日を推定して畑に作って確認し、さらに３年目にそれを微調整して収穫に導く。こうして粳キビによる念願の“桃太郎の黍団子”を味わっている。１９９３年にはやはり木俣からトウジンヒエ（アフリカガーナ産）の種を貰い受けて試作も行っている。降矢は科学者の眼で作物の成育状況を観察し、逐一記録するとともに、創意工夫を怠らない。

私の実家は山形市郊外の高瀬で、「紅花の里」として知られている。１９８９年の盆に帰省した折に、紅花の種を調達してきた。たまたま降矢から、「東北には私の心をゆさぶるものがいっぱいです。紅花のロマンもその一つで、鉢にでも作りその花を一輪でもいい、実物にふれてみることができたら感激です。（便66）」と便りをもらった。そのときには私も土産の種を入手してあったから、その旨をお伝えしたら、「「紅花有難うございます。来年は作れるんですね。（便67）」と興奮抑えられない風だった。翌年の春にさっそく試作すると、「7月10日　夢の花だった紅花現実として開花しました。待望久し85日かかりました。・・・西原ではじめて咲いた紅花なので、祖先に供えたり、菩提寺に捧げたりです。（便96）」との喜び様で、（216　みちのくの紅花今日郡内で咲き）。と詠んでいる。降矢は紅花を愛でるだけでなく、紅花の間引き菜を試食し、花を摘んで紅花茶を試飲し、種も炒って味わっている。さらに紅花の朱肉作りにも挑戦しようとしたが、翌年は天候に恵まれず、その後は体調を崩して叶わなかった。

降矢は紅花に限らず、慈姑（くわい）や宿根ソバなど、毎年のように新品種の試作に取り組んでおり、最期まで関心を切らさなかった。

## 俳句への道

長い耐乏生活でも降矢の知的欲求は絶えることなく、雨の日は勉学に励んだようである。「私は若い頃は文学青年で、短歌の方で同人誌に参加して、県下の歌友雅友は沢山ありました。詩も好きで、土井晩翠先生を敬慕し、私の処世訓を戴き、今も使っています。『強く 正しく 朗に』は愛用の判です。歌稿も整理し、沢山の同人誌も揃へ 歌集も作るはずでした。歌は農民歌人が好で、師事を仰いだ歌人（筆者註：斎藤茂吉か）もあり（ましたが）、関係のものは焼けて了たんです。漢詩を心がけた事もあり、郷土史に（も）熱くなったり。（便313）」

それでは降矢にとって俳句とは何であったのか。「・・・句は自己の挑戦でした。戦後は（短歌から）俳句に変ったが、今度は句帳もなく保存や発表も心せず、ただ自分の宿命へ挑戦のためで、只便りには時候挨拶に代え一句を作るのです。ですから自選句集を考えていませんでした。『雪虫』は私を支援して下さる方々の尊い御厚志で、恐らく『雪虫』に集まった句より句数は二倍や三倍作ったでせう。（便373・470）」

その俳句の師は、「拙宅の上の家 元参議員降矢敬雄先生勲二です。敬雄先生は新俳句（井泉水）高弟で、私の句はこの流れですが、一茶風ですよ。（便161）」そういえばこんな飄逸な句もある（177　金一封これはこれはと背をかがめ）。

過酷な農作業で苦しみながらも暗い俳句があまりないのは、降矢が後ろを振り返らず、前を向くつよい性格であったからであろう。「私は自分を厳しくしているつもりで、自己主義的な頑固物です。幸か不幸か野育ち（便76）」であったから、耳にする鳥や虫の啼き声、咲く花を農作業のはじまりとし、作物の日々の成育ぶりに眼を凝らす。「向いの山の裾辺が青葉、中腹が若葉、上は萌芽が一日と云えず変ります。（便391）」

このような自然がなく四季の移ろいが感じられない「都会では、

句はとらえきれない。（木俣便　82．3．20）だから、「正月に帰省した息子が、親爺の生活は今の（バブルの）世では最高だという。聞いてみると、心身をすり減らし、廃人になって行く同僚もあるといふ。（便16）」若いときは青雲の志をもって郷関をでることを夢想したが、山に囲まれ畑を相手にしながら句を詠んできた人生も、まんざらでもなかったのだとの想いもよぎったことであろう。

**交友関係**

降矢の交友は、雑穀研究家（木俣）、郷土研究家（窪田先生）、農家、地方の文芸家等、多彩である。仙台の土井晩翠と並んで敬愛した人に笹村草家人がいる。笹村は東京芸術大学助教授で安曇野の荻原碌山美術館建設にも貢献した彫刻家である。都会で生れ育ちながら橡原の山中に居住した笹村は、降矢とよほど気があったらしい。昭和38年（１９６３）には降矢をモデルに何日も通って来て、「光岑農子の首」（鉄）と「一茶の像」（木彫：「雪虫」裏表紙写真）を制作している。この像は降矢の家宝となっている。

私が降矢の好誼を得たはじめは昭和62年（１９８７）５月初旬である。東京都埋蔵文化財センターに併設された遺跡庭園の一画に雑穀の見本園を作ろうと、無鉄砲にも何の伝手もなしに西原を訪れて、たまたま降矢から何種類かの雑穀の種子を分けていただいた。耕した庭園に種を蒔いて芽がでたので礼状を差し上げたところ、逆に雑穀の生育状況に副えられた格調高い俳句の便りをいただき、これを契機に往復の書簡がはじまった。秋季には恥ずかしげもなく実をつけた穂を持参したことから、折々の西原詣でとなった。

降矢76歳の時で、水田稲作、養蚕、麦作中心の農作業から雑穀作りに切れ替えて２年目であった。あれから亡くなられるまでの16年間に戴いた書簡は500通にのぼる。書簡にはご自身の日常や、農作業、農作物、雑穀、山村の食、草木の花、鳥や昆虫等が豊かな語彙で綴られており、山村の自然と暮しを彷彿とさせる俳句が副えられていた。すっかり魅了されて、いただいた書簡は欠かさず櫃底に保管してきた。それは私だけでなく、降矢の謦咳に接した友人の金子愛愛、滝川照子も同じだった。

木俣美樹男は私より10年以上前から、雑穀研究のフィールドを西原と定めて降矢に邂逅している。降矢も山村の農業に深い理解と畏敬の念をもって学究する若い木俣を迎え入れ、共に雑穀研究を志す間柄であったから、木俣も降矢の書簡は大事に保管していた。

**『降矢静夫俳句集　雪虫』の刊行**

平成７年（１９９５）12月２日に、埋蔵文化財センターで木俣に「雑穀の栽培と調理」の講演をお願いした。その折に、４人とも降矢の書簡を保管していることがわかり、３年後に米寿を迎える降矢に俳句集を編んで献呈しようとなったのではなかったか。

ところが、２年半後の平成10年（１９９８）４月に、降矢は50年以上苦楽を共にされたこの夫人を亡くされた。

「初七日が過ぎ、晝は独りです。畑には鍬を置いたまま四〇日一度も行きません。・・・もう三年程、妻も私も老化していて、雑穀作りや試作をやめればよかったのかも知れません。生き甲斐とばかり調子づいた面もあり、妻は特に三年程弱くよく休ませ、独りで頑張ってきたのです。・・・心・身も空気の抜けた風船のようなんです。・・・妻の死の侘しさはさりながら、不甲斐無いことが恥ずかしいです。（便361）」

その衝撃から降矢の気力、体力はめっきり衰えていたが、９月４日に阿知河原（畑の隣人の民宿）で米寿の祝賀を催し、出来たばかりの『降矢静夫俳句集　雪虫』（１９９８．８）を献呈したこ

とが励みとなった。

「『雪虫』思いもよらず、発刊して戴いたこと、米寿の年の勲章です。都留市の郷土史に努力する窪田先生から讃辞を頂戴したり、櫛原長寿村育てた古守豊甫先生も素晴らしいと賛美してもらい、お礼の手紙を苦労して書きました。私は句（407 勲章も定年も無く句集かな）に勲章なしと詠みましたが、今回は勲章を戴いたという事だと思います。感激です。名いらぬ無名の野人が勲章を戴くとは、未聞のことでせう。（便376・378）」降矢が旧来の友人・知人に送本した『雪虫』が奇縁となって、遠方の縁者がわざわざ訪ねてきたという。

## 縄文人への親近感

イギリスのストーンヘンジをはじめ世界の先史時代人や未開民族と同様に、縄文時代の人びとも太陽の運行、月の満ち欠けを観測しながら四季の移り変わりに備えていた。秋田県の大湯環状列石、青森市の三内丸山遺跡の巨大な6本柱列も二至二分を観測するための構築物である。縄文人は狩猟・採集を生業としていたから、いつ・どこに行けばどんな食用植物が採れるとか、鳥獣の習性を知って旬の味を求めて狩りに臨んだろうし、春の大潮には村びとが総出で潮干狩りに勤しんことだろう。降矢とそんな話題をやりとりしたり、縄文に関連する文献等を差し上げたりした。

「お陰で遺跡ということを教えられ、雑穀に関連して勉強いたしました。冬至が来ますね。私は青年時代より冬至の翌日を何故元旦に定めないかと議論です。それでなかったら節分の翌日が良い。現在の一月一日はまったく意義がないんです。農には冬至の翌日がものの起源がよいからです。又節分の翌日でもいいんで、それが起点で八十八夜があり、二百十日が数えられます。

縄文人たちはこうした自然の法則を知り、冬至、節分、秋と春の彼岸中日、夏至を原点、起点として生活したことでせう。農耕があり、猟があったでせう。農耕より知らない私の一生ですが、考えてみると妙な人間かも知れません。（便43）」

縄文人への親近感について、「自分は縄文人ですから、立春が元旦で、天文学や希少の崇拝者です。（便415）」といい、さらに「私は太陽信仰の縄文人が好きで、大和民族（・・・古事記も日本書紀も藤原氏等の捏造したものの気がします）よりも縄文人の子孫であることを夢にして、天道様崇拝で、天道様に恥じないことを根本にして自分の宿命に挑戦してきました。（便442）」という。

## 晩年の病苦

ところで、降矢は80歳の平成2年（1990）1月半に、凍結した自宅前の坂道で転倒して左腕を脱臼骨折する。（206 残雪の坂道怖しするするり）30年振りの医者通いを余儀なくされ、40日間のギブス生活を送る破目になる。

「天罰の拷問だったか、ギブス昨日とれました。寒中鍛錬終りました。ご心配かけました。三十年の修理、ネジも鋲もゆるんだ感で体全体が衰えたようで、・・・今後ボツボツ鍛錬し鍬を使える日いつか、経過次第です。（便81）」それからめっきり体力が落ち、冬には腕が痛み筋肉痛に苛まれるようになる。

翌81歳の平成3年（1991）は台風の襲来が相ついで、上野原―西原間の道路が崩壊するなどの被害もあった。「二回目の大厄だった年、自然も病み、私も病んだ。（便178）」という。前年10月頃から疲れのためか、めまい、耳鳴り、視力も弱るなどの症状があり、年明け7日に倒れて町立病院に入院する。傍で妻が看護の寝たきりの点滴くらしが20日間つづき、あまりの苦しさに絶望と覚悟したという（便115：229 点滴の水滴見いりまた今日も）。2月8日に退院したものの、春耕の時季なのに新暦しかなくて困っ

たという。それで急遽、旧暦が載っている「高幡不動尊暦」を入手してお送りしたら喜んで、それから毎年暮のならいとなった。

それはともかく、町立病院入院中に左眼を失明？右眼の視力も弱かったから、今度は病後の肥立ちが少しよくなった3月半ば過ぎに立川共済病院に入院し、19日と26日に両眼を手術する。月末の31日に退院し、何日か置きに通院検診したが、遠方の西原から長男が仕事を休んで付き添う困難な通院を見かねた主治医の好意で、5月25日に再入院する。本人は5～6日にまとめて処療すれば退院するつもりだったがなかなか好転せず、7月半ば過ぎまでの長期入院になった（240 療友の去り又去り七月に）。

入院先を立川の病院にしたのは、長女が昭島に居て何かと頼りにできたからであった。たまたま木俣・金子・滝川も私も立川には近かったからよく病棟を見舞ったし、休日には主治医の許可を得て、木俣は学芸大学の研究室と実験農場からご自宅にもお連れして、家族ぐるみで歓待している。私も多摩丘陵へ案内し、埋蔵文化財センターでは秋蕎麦の花盛りとシコクヒエの生育をみてもらった。正月過ぎから延べ100日に及ぶ病棟生活だったが、わずかでも降矢の無聊を慰めることができたのは幸いだった。

**長逝まで**

平成11年（１９９９）正月に、降矢が目標としていた、7人兄姉で唯一生き残っていた6歳上の甲府の兄（勲三）が94歳で長逝した。「司法と農で、住む社会が違うから兄弟愛は薄い。それでも生きていることはお互いの支えでした。（降矢一族はその）叔父さんを誇りとして皆努力して、孫たちもそうで、・・・（便382・385）」と慨嘆している。

追い打ちをかけるように、長い交友だった町内の文化人の畏友が亡くなり、「特に昨年から知人、同輩、近親者も他界して了たので人生当然のことですが、生き残ることも流石に孤独にはなれていても、生きる張り合いが抜けます。（便389）」と嘆く。

「死ぬ人が多いので、死んだつもりと考えれば諦めがつきます。死とは自然に還ることで、後はどうなるか？こう思うといいですね。（便436）」と達観したが、・・・「孤独にはなれていますが、語ることも聞くことも生きていれば必要で、無言が続くと頭が変です。（便400）」と、語らいのない日の孤独感を訴える便りが増えていった。しかし、気力の方は衰えることなく、書簡数と瑞々しい俳句の数は、92歳余の最期まで維持されたのであった。（図1）註。

死を迎える4カ月前に、「この齢では（来年）畑に出られるか。でも人間は生きていることは働くというか稼ぐことで、それが実行できぬのは死と同じです（便493）」と、古武士然としている。

降矢は幼いときから病弱であったというが、34歳の硫黄島での戦時体験、41歳の半年間の入院、さらに80歳の脱臼骨折から81歳時の延べ100日間の入院と、少なくとも4度死線を超えながら、試練を天意として乗り越え（便226）、平成15年（２００３）2月10日に92歳余で長逝した。学歴こそ小学校卒ではあったが志は常に高く、学習意欲にあふれ、明治・大正・昭和・平成の4代を、木俣の言う「教養ある農人」として、清貧に生き抜いた人生であった。

私が敬愛する八王子市の考古学者椚國男に『雪虫』を進呈したら、降矢の俳句に感動して便りをしたいからと住所の問合せがあった。降矢からは、「はじめて知らぬ人（椚）から讃辞をいただきました。安孫子さんの知人らしく人柄は判断できる。能筆で立派な人のように推定しました。（便375）」2人の間で雪虫談義も交わされたようだ（便382）。椚には多摩地域の考古学に貢献した人士をつづった名著『土の巨人』がある。「土の巨人」とは素晴らしい用語で、まさに降矢を讃えるにも相応しい称号ではないか。

註・「木俣と安孫子の収受した降矢静夫の書簡と俳句の推移」のデータを図にしてみた。スタートが10年違うにも拘らず、二人の収受数が大きく違っている。この一因は、木俣が東京学芸大学環境教育実践施設の教授として教育活動で忙殺されたことと、国内外の野外研究で留守勝ちだったことが大きい。安孫子も東京都の埋蔵文化財行政の傍ら縄文考古学の研究に携わってはいたが、西原までは車で90分ほどと近距離で、写真撮影など降矢の依頼に応じやすかったこともある。そういう事情が反映してのことのようである。

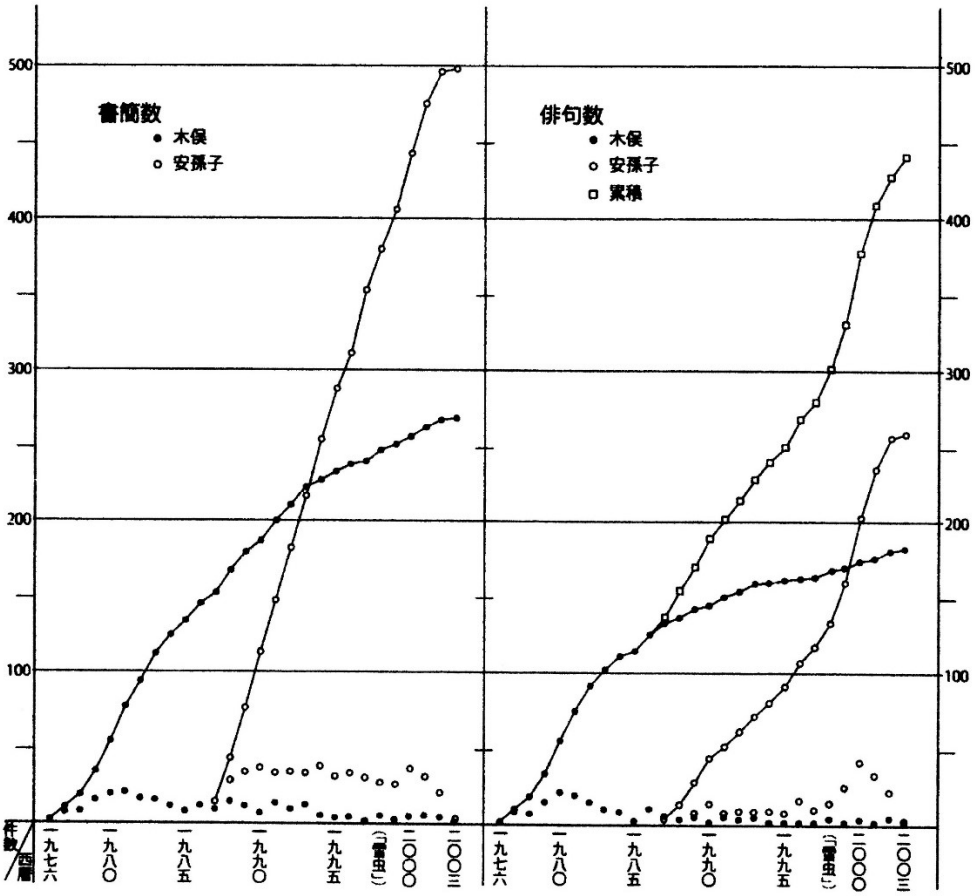



図１　木俣と安孫子が収受した降矢静夫氏の書簡と俳句の推移

## 降矢静夫　執筆等関係誌（手許の資料に限る）


1948　『やまめ句集』降矢百峰（敬雄）主宰　やまめ俳句会

？　『やまめ句集２』降矢百峰（敬雄）主宰　やまめ俳句会

1952　「狐」『郷土の総合雑誌―文化人』第１巻10號

1981　「山村から」『曠望』第５号

1983　「笹村草家人の作品を訪ねて」『曠望』第11号

1986　「降矢静夫さんに聞く」安藤正文（上野原市の郷土史家）

1996　「私の大正時代」『創立120周年記念誌　飛翔』上野原町立西原小学校

1997　「降矢静夫さんに聞く―雑穀とともに生きる」『地上―雑穀特集』家の光の姉妹誌